

つなごう 自然、歴史、仲間——アート・ビオトープ小豆島 旧戸形小学校

”とのしよう・前島” 活性化協議会“が発足

1月21日、小豆島土庄役場にて「とのしよう・前島活性化協議会」の発足を記念する基調講演会が開催された。「とのしよう・前島活性化協議会」は、オリブ植栽100年を迎える本年度に、小豆島がより活性化するために発足されたものである。この会には土庄町だけでなく、小豆島の将来を考える地元有志の方々が自主的に参加した。その参加者総数は30名を超えた。



内閣府・木村俊昭氏

開催にあたって、土庄町・岡田好平町長、協議会代表世話人・柳生好彦氏、そして今回の協議会発足のきっかけとなったアート・ビオトープ総合プロデューサー・郷右近氏からこの趣旨と経緯の説明がなされた。

本会の目玉として「内閣府・構造改革特区担当室、地域再生事業推進室、企画官・木村俊昭氏」が来島し基調講演を行った。熱のこもった講演にも、時には場内に笑い声があふれた。具体的な地域を活性化するためのポイントを教授しては、それに反応してうなづく人々。木村氏は「地域を活性化することが、日本の国力を上げることである。」と、自らの考えを述べた。

さらには「小豆島を初めて訪れたが、とても豊かな島である。」との印象を語り「元々もっている豊かな資源、自然環境を活かした経済発展のあり方が必ずできるはずである。」との見解も述べた。そのためには「活性化を進める人材が必要不可欠であり、それは地元の人々を中心になることは勿論であるが、時には外来する人によって地元の人々が触発されるものである。そのような成功事例を数多く見てきており、今回の活



のしょう・前島
と活 性 化 協 議 会
ポ ー ト vol.1

平成20年度は、小豆島の象徴でもあるオリブ植栽100周年ともなる。しかし、近年観光人口も衰えを見せることや、島内からの人口流出、雇用機会の低下もおきている。そこで、この機会に新たな地域活性化運

「とのしよう・前島活性化協議会」設立趣旨

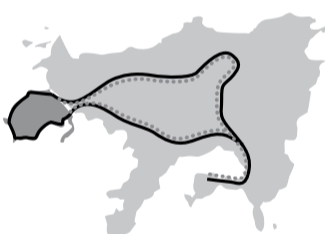
動につなげたいと考えた。

小豆島には「24の瞳」「寒霞溪」に代表される観光基盤があるが、とのしよう・前島地区はそれらのルートから外れていることから、来島する観光客に対して十分なPRが足

りていない。しかし、エンジェルロードをはじめとする豊かな自然、自然との営み、農村歌舞伎などの文化資産や、環境産業に関わる資源の豊富さなどは、将来の経済発展の可能性が高いものと思われる。以上の

合わせ、新たな観光拠点を整備、新産業の創出を推進し、中期的な計画をもって活性化をはかること。あわせて地域の環境力、教育力、福祉力、文化力増進などのボランティアな社会貢献活動を目的とする協議会を設立するものである。

ことから、我々は、地方経済の活性化と持続可能な循環型社会形成のため、行政、企業など既存の組織的制約にとらわれず、地域資源を再編成できる仕組みづくりを研究しつつ、「とのしよう・前島地区」に視点を



—— 新観光ルート
..... 既存観光ルート

アート・ビオトープ小豆島ディレクターの

“ひとりごと” 第1回

雨上がりの土庄港に降り立ったのは、6月の夜だった。

新岡山港からの最終便。ひとけのない港町では、右も左もわからない。予約を入れていた宿に電話をいれ、港まで迎えに来ていただいた。お迎えの後を、つれと二人で宿までついていく・・・

アジア〜アフリカをフィールドワークしてきた私にとっても、国内で、大阪より西の町を歩くのは初めてのことである。気持の高鳴り・・・いつの間にか眠りについてた・・・

翌朝。食べきれないほど盛りだくさんのおもてなし。昨晚といい、今朝といい、おぼやんの暖ったかい心が伝わる。

土庄町役場を訪ね、ご挨拶。職員のご案内で、廃校になった「旧戸形小学校」に向かう。

クルマから見る高松の遠景。瀬戸内の穏やかな波が煌めく。

・・・どんな施設にするのか。体で感じる、五感で感じること。私はこの感覚を支えに生きてきた・・・

戸形小の校庭に立つ。陽光、波音、足裏の芝、浜風、鳥のさえずりが五感を刺激する。

今まで体験してきたインド洋に浮かぶアフリカの島、アジアの島々。島特有の時間がここにもある。

しかし、どことも違い、どこにもない特別なもの。

美しい。素晴らしいところ・・・

ここで一番貴重なものは時間であると確信した。そして、テーマとするべき“ことば”が降りてきた・・・島特有の自然、歴史、島の仲間たち。これらを繋ぐ。未来に守り伝えていく。

「つなごう自然、歴史、仲間」

富田 勝彦 [とみた かつひこ]

造形美術作家。アフリカ〜アジアをフィールドワークしながら創作活動を続けている。「アート・ビオトープ小豆島」開設にあたり、ディレクターを務めている。

活性化協議会には大きく期待をする。」と締めくくり、万雷の拍手で約1時間半の講演が終わった。講演終了後、木村氏、岡田町長、柳生氏、郷右近氏等が、会談を行った。木村氏は「日本の将来を考えるには、地域の活性化」を推進する以外に日本の未来は開けない。そのため全国各地を廻っているのだが、この小豆島はとても魅力的な地域であると、来島して感じました。」とあらためて感想を述べた。そして、この構想は10年の歳月をもって推進していくものであり、その活性化の第一弾を本年にスタートさせる様、計画を進めていきたいと思います」と、全員同じ目標に向かった会談が熱を持

ちながらも和やかに終了した。この会談を終え、小豆島は観光のスポットとしても栄えてきた島であるが、将来に向かって新たな魅力を創造し、今までにない新しい来島者を増やしていくことが必要である。幼稚園児、小学生、中学生などの子供をもつファミリー、若いカップル、若い女性の友達連れなどの訪問客に楽しんでもらえる島にしていきたい。そのためには新しい観光スポットとして、前島を開発していくことが必須であり「アート・ビオトープ小豆島」は、新たな観光スポットであるだけでなく、島に住むみなさんが、楽しく集える場所としなくてはならない・・・との想いを固めた。

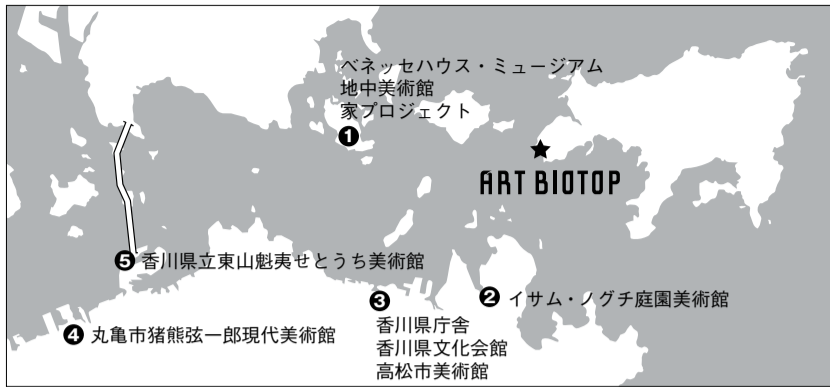
小さな美の巡礼の奇跡

環瀬戸内 アート圏への誘い

「変貌するアートを引っ張る瀬戸内の風土」

現代のアート・コンシャスな若者たちの、興味はどこへ向いているのか。これは、美大の教師だから、否応なく目の当たりにする。

経済的に停滞したとは言え、九〇年代以降のアートの世界は、グローバル化と大衆化、何よりジャンル・オーヴァーな領域横断の波によって、それまでの閉鎖的な特権享受的エリート的な方からは変貌著しいものがあつた。その見え方も、従来



の絵画・彫刻の括りからは飛びだすような新種のものが、実際増えた。

人を集めて郷土自慢料理を振舞ったり、自ら焼いた茶碗で茶会の真似事をしたりと、アートは作品そのものでなく、モノを巡る人とのコミュニケーションや、場の祝祭的な空気や、そのまた向こうの、季節時刻で、豊かにさまざま表情を交える自然環境を、生身の五感で感じる訓練にまで、開かれつつある。

そこで、二十一世紀のキーワードを拾い出せと言われれば、私なら三つ、「新しき観光」巡礼、「クリエイティブなテラシー」、そして、著名な哲学者ベンヤミンのいう「五感をくすぐる触覚的体験」ということになっている。

じつはこの三つ、意外にもどうか、当然ながらというか、古来から風光明媚な自然と、豊穡な山海の味覚で鳴らした瀬戸内圏内に、新たなアートのかたちをとって、集結しつつあるようだ。

香川県が、今日、何より世界の文化人を魅きつけて止まないのは、やはり弘法大師のすごさ、四国八十八箇所の霊場のありがたさが甦ったのだとも感じるほど。ひとつは、いずれも、端正に誠実に人間が手間隙かけてつくりあげてきたものだが、決して現代日本では、大規模な施設とは言い難い。それがまた、瀬戸内

香川の素晴らしところだろう。

「アート」魂が、風土を発見する小さな奇跡」

観光とは元来、その土地の霊に交わって人智を超える何かにあやかっ

て日常に帰ること。そして在り来たりだと思っていた日常

そこに再び驚きを見出し、新たに日々を活性化することだ。その巡礼の奇跡を意味した。それは今日、

名所旧跡めぐりにとどまらない、「自分だけの小さな霊地」を発見することである。

その点、瀬戸内の小さな直島に、島に棲むというユニークな文化を見出して、安藤忠雄さんによるパッキリとシャープな、素敵なホテルと美術館を建てた、「ベネッセ直島文化村」(図①)は、島の町なかの家でアーツに仕事をさせた秀逸なプロジェクト群とともに、大きな世界性を獲得した好例。



そんな、環境や風土こそが、人間が真にクリエイティブな自分を発見するためのもっとも大事な触媒だといふのを知っていたのが、ご存知日米混血の大彫刻家、イサム・ノグチ(1904-1988)である。高松にフェリーで渡って郊外は牟礼町、屋島と霊場五剣山の山懐の石工の村、涼やかな風の年中吹くこの地に、先駆者ノグチがアトリエを築いたのは、六〇年代のことだった。今日そのアトリエは、二十世紀芸術の聖地として、一般公開されている。(図②)

高松は、名物知事金子さんが普請知事だったこともあって、戦後すぐの五〇年代から、丹下健三の傑作、香川県庁舎や体育館をはじめ、大江宏の文化会館など、インテリアなど

も必見のもの、名作建築王国でもある。かなりのものが、良い状態で保たれているのが、メガロ都市東京とちがうところだ。(図③)

四国独特の、ぼったりもっこりした異風の山を見ながら、おとなりの城下町、丸亀へ行くと駅前には、地

元出身で、戦後の前衛芸術を牽引した猪熊源一郎画伯の記念美術館(図④)がある。モダンで、どこか日本的な表情のすっきりした建築、設計は数年前、モダン・アートの世界的殿堂、ニューヨーク近代美術館の改装を担当した、谷口吉生さん。三越のバラの包装紙や、上野駅のコンコース壁画で知られる画伯の、ハイカラな気風も瀬戸内の風土から来ているのを知るのは、嬉しいことだ。

谷口さんは、四国大橋の始まり、坂出の突端に、デッキのように小さいが、このうえなく美しい、海に對峙した美術館を東山魁夷画伯のために三年前に設計して、これまた、地元で大人気を呼んでいる。(図⑤)

小さい霊地。自分なりの、自分だけの風土の発見。それが、ここ小豆島のアート・ビオトープに集う人たちの、祈念と期待であることもまた、言うまでもないだろう。

(この項、続く)

菜の花 —アスラナという作物—

八代田 素樹 [やしろだもとき] 昭和13年生まれ、小豆島・洲崎在住。

田ノ浦半島の先近く、低い山の背が落ちて開けた場所に「二十四の瞳」映画村(壺井栄文学館を併設)があります。小説の背景を再現したロケ時のオープンセットの傍らに、一枚のナノハナ畑が設けられています。春になると、映画村のナノハナは年輩の観光客の感慨と郷愁を誘っているようです。又、ナノハナはどこまでも明るく、潮風を受けて写真を撮っている若いカップルを包み込んでいます。ところで、ナノハナといえばアブラナの花の事ですが、江戸時代の蕪村の句

菜の花や 月は東に 日は西に

のナノハナは古くからのアブラナで蕪菜や白菜と同じ植物でした。唱歌「朧月夜」の時代になるとナノハナは明治が導入した油量の多い西洋アブラナ(別種で異質4倍)に代わりました。その洋種も搾油原料(菜種)の輸入化に伴って、昭和の中頃、畑から姿を消しました。“一面のナノハナ”は広大なカナダに行ってしまいました。

一方、花の美しい古いアブラナは別系統の葉菜(縮緬白菜?)から蕾を食べるナバナや花を見るハナナが改良されて、健在です。映画村のナノハナは此のハナナで、西洋アブラナのイメージの代役を務めています。土手の芥子菜の仲間も又、ナノハナと言います。何時の世にも人々とともに身近なナノハナがありました。ナノハナの定義はおおらかです。

① マーケット出店者募集

- 地産のお惣菜(現場調理歓迎)
- 海鮮(干物、加工品)
- 食品(加工品)
- 青果
- 生花
- 植栽

② スタッフ募集

- アート・ビオトープ、AIRなどの施設運営。企画。学芸員資格者歓迎。
- レストランスタッフ。経験者歓迎。

① 問い合わせ先

03-6826-3550
アート・ビオトープ小豆島
東京準備事務局

新見隆「にのみりゅう」
武蔵野美術大学芸術文化学教授、イサム・ノグチ庭園美術館学芸顧問、ギャラリー冊アート・ビオトープ那須、顧問・キュレーター

美しい島、癒しの楽園

小豆島国際ホテル
予約専用フリーダイヤル
☎0120-087962
☎0879-62-2111(代表)

“自然の恵み”
オリーブのスキンケア

小豆島ヘルシーランド(株)
☎0120-77-0000
http://www.healthylive.com/